

巻 頭 言

「一隅を照らす」を超えて

獨協医科大学越谷病院 整形外科 大 関 覚

「径寸十枚これ国宝に非ず，一隅を照らすこれ則ち国宝なり」とは天台宗の宗祖最澄のことばだそうです。お金や財宝は国の宝ではなく，家庭や職場など，自分自身が置かれたその場所で，精一杯努力し，明るく光り輝くことのできる人こそ，何物にも変えがたい貴い国の宝である。一人ひとりがそれぞれの持ち場で全力を尽くすことによって，社会全体が明るく照らされていく。インターネットで調べてみると今も「一隅を照らす」として宗教的実践運動があるようです。釧路市立病院の医局にこの言葉がかけてあったことを時々思い出します。私も，「少しでも良い治療を一人一人の患者に行いたい」と考えて努力してきたつもりですが，予算編成で話題になった「事業仕分け」を見ると，どうもそれだけでは足りないようです。救命と外傷に関わっている整形外科医は，いつも困難な状況の中でいろんなものを「犠牲」にしてより良い治療を求め仕事を続けて来たと思いますし，私自身もその一員であることに誇りを持ってきました。「整形外科は湿布だけ」こんな発言をする政治家は「何も知らないのだ」とあきれますが，家庭を犠牲にして長時間労働にめげることなく若い研修医を鼓舞してきたことが本当に正しかったのかと悲しくなります。

私は4年目の研修を釧路市立病院でさせていただきました。既に他界された多胡先生が部長でした。市立病院でしたので多岐にわたる申請書類を患者さんが持って初診して来ます。多胡部長は月曜の午後に特別診を開いており，この時間に患者さんを診察し書類を書いておられました。ある日，高齢の男性が診察室に入るなり怒鳴り出しました。多胡部長は，合間に一言二言，質問を入れながら問診を続けます。次第に患者は落ち着きを取り戻し，最後は静かに帰って行きました。私は隣の診察室で一部始終を聞いていました。「どうして先生は怒らないで，あんな患者診ていられるのですか？」尋ねると「大関，あの患者がどんな治療とどんな扱いをこれまでされて来たか考えてみろ。だれも診断してくれない，誰も治してくれない，誰も彼の苦しみを理解してくれない。そのことに彼は怒っているのであって，私に怒っているのではない。」私にとっては，何か違う世界が開けた経験でした。「一隅を照らす」とはこう言うことなのだと思います。今も時々，多胡部長の姿が脳裏によぎります。

ただ，毎日の診療では腹に据えかねるものの連続で，怒らずにはいられないことも多々あります。プレート固定の螺子が一本一本滅菌されており，きわどい整復位を指で押さえているのに螺子が出てこないなどと言うのは怒りを超えて悲しくなります。妥協しないベストな仕事を完結したいと考えるのは整形外科医なら当然で，「そう思えなくなったら仕

事は辞めよう」。それくらいの覚悟はあるつもりですから、こんな優先順位をはき違えた厚生労働省の行政には我慢がなりません。こういう汎用材料は、繰り返し滅菌して使うのが一般的で、螺子が壊れるのは品質が悪いからではなく使い方の問題であり、「材料追跡の意義は少ない」ことを厚生労働省に分からせなければなりません。こういう問題に誰も発言しないのはなぜなのか私には理解できません。人工関節の手術に、メーカーの担当者を立ち会わせないとする公正取引委員会の指導も理解できません。そもそも医療の現場の問題に、公正取引委員会の関与が許されるのか？手術室からのフィードバックで道具や手術手技は向上して行くものだと思います。

最近では、一人一人が「一隅を照らす」だけでなく、間違った判断に対しては「これは間違いであり危険である」と、直ぐに声を上げることが必要なのだと考えるようになりました。「こんな規制はおかしいだろう。」と現場で働く医師たちが発言しないと、整形外科の仕事はさらに困難のものとなり、リスクの大きい外傷の治療を担当する若手がいなくなってしまう。今や絶滅危惧種と心配される救命整形外科に、若い先生達が入っていけるよう今日も体を張って、がんばりたいと考えるこの頃です。関東に来て、北海道の外傷治療のレベルの高さを再認識していますが、互いに切磋琢磨して日本の明日を切り拓きましょう。